原発の恩恵を受けた日本人こそ新しい社会基盤を模索すべき

南相馬市立総合病院　副院長　**及川 友好 氏**

及川友好副院長

東日本震災後２年が経過した。この２年の間に、私自身の人的交流はかつてないほど深まり、同時に科学的、社会的にさまざまな情報を得ることができた。中でも、震災後早期に私自身の内部被曝データを得たことは大きい。

「3890Bq/body」―2011年６月25日、女川原子力発電所のホールボディーカウンター（ＷＢＣ）がはじき出した私の内部被曝データである。このデータは、同時に測定した金澤幸夫院長の内部被曝データとともに、南相馬市民の内部被曝を測定した最速データと思われる。私は機会ある毎に自分の内部被曝データを用い、内部被曝測定の重要性を訴えた。

講演の席では、内部被曝測定の重要性についての賛同の声が多く寄せられた。当時、行政が内部被曝測定について、無関心を装っていた時期であり、これらの声に勇気づけられた。また、同時に「内部被曝していて平気でいられるのか」「内部被曝しているのだから、東電を告訴しなくていいのか」という私自身の原発行政に対する姿勢を問う質問も多く聞かれた。

がれきの向こうに原発が見える

1990年、私は職場結婚をした。妻の実家は兼業農家であり、農業を営む義理の祖父、祖母が健在で、義父は福島第二原子力発電所勤務、義母も関連産業に従事していた。「原発の近くに実家がある」と以前から聞いていたが、初めて妻の実家を訪れた日を忘れられない。原発の排気塔が見え始め、「かなり近いな」と思っていると、原発は山１つ隔てすぐ隣にあり、実家とは１キロも離れていない。夜になると排気塔の障害灯が赤々と点滅し、私は不気味な違和感を覚えた。

しかし、違和感はすぐに消え去る。サラリーマン家庭に育った私には、農家の生活はいつも新鮮で、妻の実家を訪れるのが楽しみの１つになった。広い庭には、母屋、隠居、蔵が建ち、田植え、盆、正月には親戚家族、ご近所が集い合う。朝からビールを飲み、仕事や政治（特に地方選挙）、子孫の話をしながら笑い、好きなときに寝転ぶ。心が安らぐ瞬間であった。原発の排気塔はいつしか風景の１つになっていた。

あるとき、ふと義理父が昔話をした．原発のなかったころの話である。「原発がないときは農閑期に東京まで出稼ぎに行っていた。そんな貧しい農村に原発ができた。原発に就職し、初めて安定した収入がはいり、出稼ぎもなくなった。原発がなかったら、娘３人を大学に出してやることはできなかった」。そして、妻も当時を振り返る。「子どものころ、お菓子は食べたことがなかった。唯一のおやつは、牛に食べさせる蒸かし芋の残りを食べることだった」。

日本の多くの原発立地町村は、１次産業と原発による経済効果で地域社会が成り立っている。そこでは原発によるインフラ整備と安定した収入により，さまざまな地域の伝統や昔ながらのよき地域共同体、大家族制が40年以上守られてきた。地域に残った若者は，地域社会の中で子育ての援助を受けながら仕事する，ある意味での理想的なcommunityである。

しかし、われわれは原発という砂上の楼閣が地震と津波により一夜で崩壊し、900ペタベクレルにも及ぶ放射性同位元素を東日本にまき散らす事実を目の当たりにした。ユートピアは崩れ去り、避難者は、故郷を目指すことすらできない。原発の恩恵を受け生まれ、育ち、生を営んだ彼らは、いま何を思うのだろう。

全国17カ所の原子力発電所に52基の原子炉を持つこの国は，福島と同じく原発に守られた桃源郷を到る所に抱える。原発の安全神話の崩壊と理想郷の崩壊を経験したわれわれ日本人は、原発に代わる新たな社会基盤を、世界に先駆けて模索し続けなければならない。